

# 治水事業の効果 (岐阜県 <sup>とくやま</sup> 徳山ダム、<sup>よこやま</sup> 横山ダムの洪水調節による効果)

○平成26年8月豪雨(台風11号)により、木曾川水系揖斐川では大規模な出水が発生したが、<sup>とくやま</sup> 徳山ダムと<sup>よこやま</sup> 横山ダムの洪水調節により水位を2m低下させ、浸水被害を回避。  
 ○ダムによる洪水調節の結果、約6,100億円の被害を未然に防止。

## 位置図



## 徳山ダム



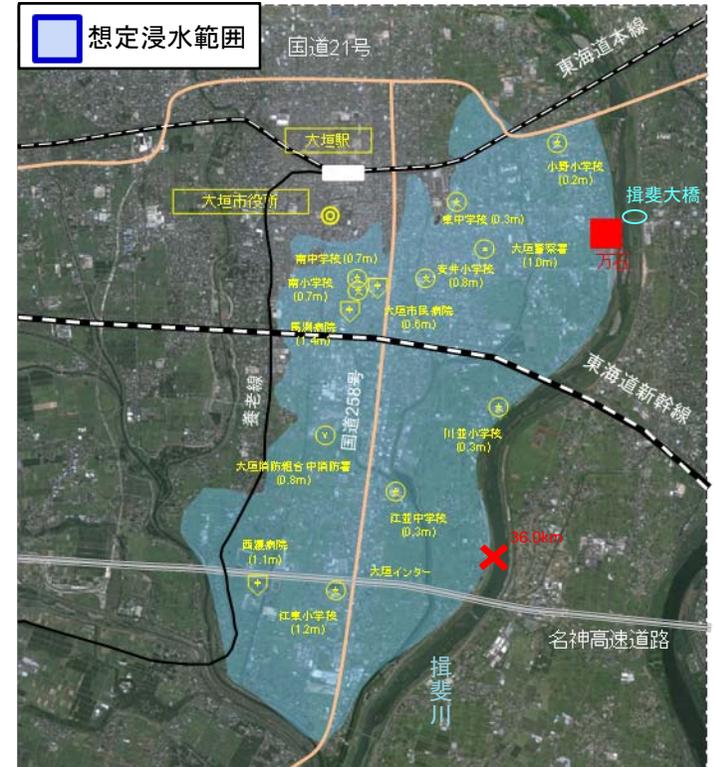
## 横山ダム



## 平成26年8月豪雨出水状況



- ・ダムがなかった場合、堤防決壊のおそれ
- ・仮に堤防が決壊していた場合、大垣市街地が浸水し、約6,100億円の被害が発生したと推定

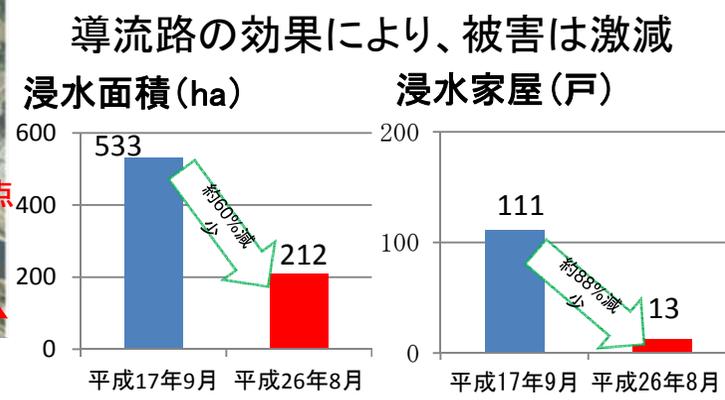


※仮に徳山ダム・横山ダムが無かった場合、万石地点では計画高流量を超えた洪水流量になったものと試算。この流量が流下し、揖斐川右岸36kmにおいて破堤・はん濫した場合の浸水想定から被害等を試算。

# 治水事業の効果 (高知県 波介川河口導流路による効果)

- 洪水時、波介川は仁淀川本川の高い水位の影響により水はけが悪くなり、土佐市中心部は度重なる水害に悩まされてきた。
- 仁淀川水系波介川では、仁淀川と波介川との合流点を仁淀川河口に付け替え、波介川の洪水を流れやすくする波介川河口導流事業に着手し、平成24年6月より運用を開始。
- 導流路完成前の平成17年9月台風14号と比較し、平成26年8月豪雨(台風12号)では2日間の雨量が約2.1倍であったが、導流路の効果により浸水面積212ha、浸水家屋13戸と被害を大幅に軽減。

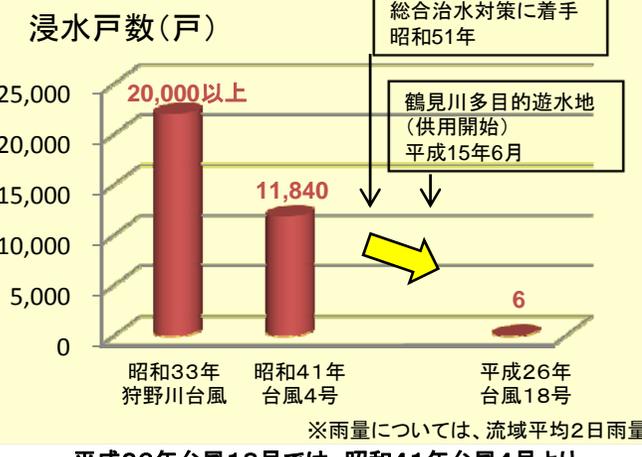
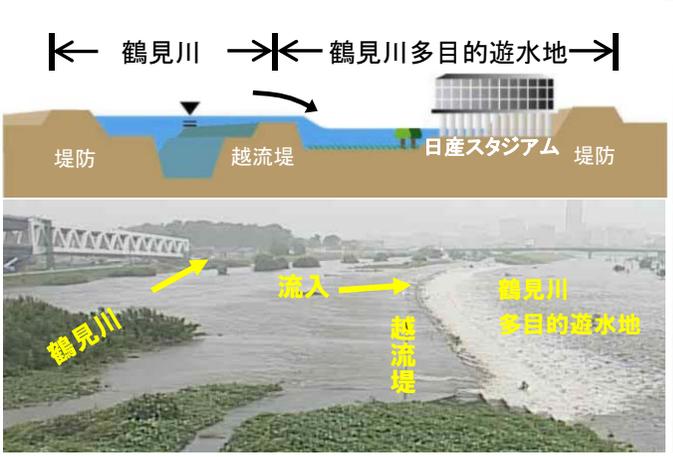
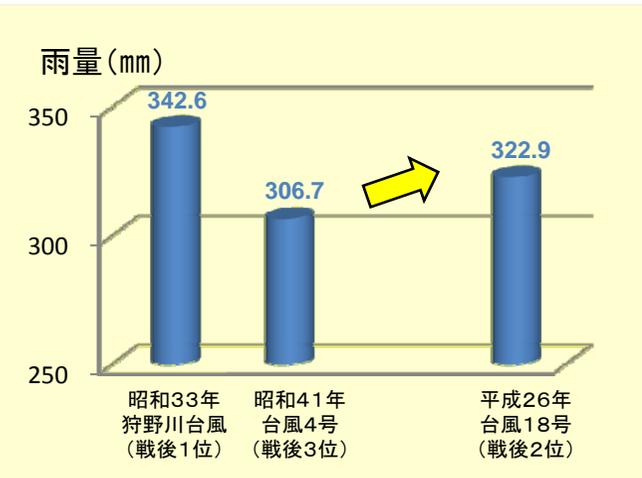
## 波介川河口導流路の効果(H17、H26比較)



合流点を、水位の低い仁淀川河口部に付替え

# 治水事業の効果 (神奈川県 鶴見川多目的遊水地などによる効果)

○平成26年10月の台風18号の豪雨により、鶴見川流域では戦後2番目の雨量を記録。  
 ○鶴見川多目的遊水地で154万m<sup>3</sup>(過去最大)を貯留するなど、これまで講じてきた対策が効果を発揮し、昭和41年台風4号(浸水戸数11,840戸)より雨量が多かったものの、浸水被害を大幅に軽減(浸水戸数6戸)。



鶴見川の水位が上昇し、越流堤から鶴見川多目的遊水地に流入

過去最大となる154万m<sup>3</sup>を貯留した鶴見川多目的遊水地

※雨量については、流域平均2日雨量  
 平成26年台風18号では、昭和41年台風4号より雨量が多かったものの、浸水戸数は6戸